

急度無懈怠、如先規可有建立事肝要候。仍如件。

天正七年八月十三日

景^(龜井) 隆 在判
堯^(平) 知 在判
長^(三宅) 盛 在判

一宮惣中 參

(天正五年十一月廿四日の條參照。)

八月廿三日。上杉景勝、珠洲郡の飯田與三右衛門に、長景連の指揮に従はしむ。

【歷代古案】

一六三四

音信到來祝着之至候。仍一儀迄ニ小袖二遣之候。扱亦其元長與一井島倉孫左衛門入魂之由、可然候。彌彼兩人差圖次第可走廻二事肝要候。猶重而謹言。

八月廿三日

景^(上杉) 勝

飯田與三右衛門殿

九月四日。上杉景勝、加賀の一向一揆等に、當月中その出馬すべきことを報ず。

【別本歷代古案】

一六三五

去月八日之書狀、今月三日到來、慥見届候。皆々越中境堪忍、門跡手前相守之由、心地之至感入候、仍當方出馬之儀、初秋相定之處、越中相殘侍共、様々申寄子細共候間、其旨趣首尾調之間、於于今延引之様候。近日時宜可相調候間、當月中必可令出馬候。其間之儀、如何茂仕置肝心候。將亦當方之儀、無心元存間敷候。縱如何様之儀候共、前代以來賀州入魂之儀候間、見放儀有間布候。此段有疑心者不可有曲候。兎角越中之者共申寄様子有、首尾も爲不亦相調も候。於出馬者令必定候間、彼烈火先次第手合專用候。恐々謹言。

九月四日

景^(上杉) 勝

九月四日

蛭川新七郎殿

廣瀬四郎二郎殿

奥彦四郎殿

長谷川兵十郎殿

高桑源左衛門尉殿

山本若狹守殿

高橋新左衛門尉殿

十月二十日。織田信長、長連龍に、その越中松倉の事情を報じたるに答ふ。

【長 文書】

一六三六

當國彌靜謐之由、尤以可然候。仍鱒五到來候。遠路懇情喜入候。次重而十二日之狀、同時參著披見候。松倉面事得其意候。猶追而可申候也。

十月廿日

信^(織田) 長 在印

長九郎左衛門尉殿

十二月十八日。上杉景勝、その臣河田長親に、先に鳳至郡甲山に在りし島倉泰明が越中魚津に自盡せるを以て善後の計を命ず。

【山田 文書】

一六三七

島倉孫左衛門尉不慮之仕合、無是非候。然間魚津之備可爲究届候。巨細不能申候。孫左衛門尉扶助之者不散之様ニ加意、尤候。爲其弟大井田藤三差越候得共、若輩之儀

候間別而引廻、堅固之仕置肝要候。油斷不可有候。謹言。

猶々自爰元差越候者共、何も其地計被差置由候。魚津之備大切候間、引分彼地ニ被置可然候。乍幾度來春出馬之内堅固之仕置専用候。以上。

極月十八日

景^(上杉) 勝

【河田 文書】 羽前

一六三八

魚津地仕置之事、仰出之旨奉得其意候。彼同心之者共無相違相踞申候。然處大井田藤三被差越候。彌以外聞實儀不可過之候。先段如致詞上候、無相替儀御座候。委曲口上申宣通、可被達上聞由、宜預御披露候。恐々謹言。

河田豊前入道

極月廿六日

禪^(長親) 忠

黑金兵部少輔殿

(上杉家記に、十八日、是より先能登國鳳至郡甲山の城番將島倉泰明自盡す。去歲謙信の卒するや、泰明城を棄て、越後に歸る。人或は以て怯懦となす。泰